大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

『東征稿』に見る中井竹山の江戸行

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 湯城, 吉信 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007579

『東征稿』に見る中井竹山の江戸行

湯城吉信*

Nakai Chikuzan's Journey to Edo Seen in *Touseikou*

Yoshinobu YUKI*

要旨

中井竹山著『東征稿』は、大坂の懐徳堂の儒者中井竹山が、明和9年（1772）の江戸行を漢詩で著した漢文紀行である。同書は、竹山の行動や人的交流を知る上で貴重な史料である。本稿では、同書の執筆背景及び同書に収録されている詩を分析することにより、竹山の江戸行の実態と竹山の思いを明らかにした。

Key Words: 東征稿，西上記，中井竹山，堀田正邦，紀行

1．はじめに

江戸時代の大坂の懐徳堂の儒者、中井竹山は、明和9年（1772）、43歳の時、近江宮川藩主、堀田正邦[1]に随って江戸へと赴き、『東征稿』『西上記』という漢文紀行を残した。『東征稿』は、往路の様子を漢詩で表現し、『西上記』は、復路の様子を漢文で表現している。

両書は、竹山がどのような活動をし、どのような人と交流していたかを確認することができる貴重な史料である。

この竹山の江戸行について、西村天囚『懐徳堂考』は、旅の目的は定かではないとしつつも、堀田侯を頼った就職活動ではなかったかと推測している[2]。

一方、田中佩刀「中井竹山と「東征稿」」は、竹山の旅は文人として旅を楽しむのが目的であったとする。

それに対して、筆者は、竹山の江戸行は、直接的には、堀田侯から竹山への褒美であったと考える。

江戸行の前年の明和8年（1771）、竹山は当時二条城在番であった堀田正邦から『大日本史』の筆写を依頼された。そして、懐徳堂関係者37名で、同年11月初旬に作業を開始し、翌2月末に完成し、一部を堀田侯に献上し、一部を懐徳堂に留めた[3]。竹山の江戸行はこの作業完成の褒美と考えるのが自然であろう。ただ、竹山にとっては交流を広げる絶好の機会ともなったであろう。

本稿では、『東征稿』所収の詩を分析することにより、その旅の様子と竹山の思いを具体的に読み取りたい。

テキストは、懐徳堂文庫所蔵の竹山手稿本を用いた。『東征稿』は、嘉永6年（1853）の刊本がある。同刊本は、富士川英郎・佐野正巳編『紀行日本漢詩』第3巻に影印が収録されている。また、『日本儒林叢書』巻12「随筆部雑部」収録の『東征稿』（翻刻）も、同刊本を底本としている。ただ、問題は、同刊本には誤字や句読の誤りが多いことである。『日本儒林叢書』本は刊本の明らかな誤りは訂正しているが、誤字は残っている。上記の田中佩刀氏が使っているのも同本である。同本の普及を考えれば、校異の刊行が望まれる。この点については別稿を期したい。

なお、復路の様子を漢文（文章）で記した『西上記』は「迷惑年」ともじられた明和9年の風水害の様子を如実に描いており災害記録して貴重である。その紹介も別稿を期したい。

〔凡例〕

・漢字は通用字体に改めた。

・訓点は、手稿本、刊本ともに施されている。本稿では手稿本の訓点を参考にしつつ適宜改めた。

2．収録されている詩型の分析

本章では、『東征稿』に収録されている作品の形態を分析することにより、『東征稿』の特徴を探りたい。『東征稿』収録作品は漢詩、漢文全91篇である。詩型別に見れば以下のようである。

2011年8月22日 受理

＊ 総合工学システム学科　一般科目文系

(Dept. of Industrial Systems Engineering : Liberal Arts)

七言絶句	67 首
五言律詩	9 首（藤波公、佐藤子錦、宴会、渋井子章）
七言律詩	6 首（菅公、津金子隣、川上習之、井上仲竜、北圃仲温）
五言絶句	4 首（納涼、東叡山、品川、不忍池）
七言古詩	1 首（羽侯挽詞）
五言古詩	1 首（早野士誉）
賛	2 首（不定型 1、四言 1）
跋	1 篇

以上を見れば、七言絶句が大半を占めることがわかろう。特に、叙景詩はだいたい七言絶句である。

その他の詩は、相手の詩に合わせて詩型が決まったと考えられるが、様々な詩型の詩を収録しているのは、どのような詩も作ることができるという自己顕示だと考えられよう。

また、身分の高い人や重視する人には長い詩を送る傾向が見える。例えば、京都の公家、高辻世長（菅公）や、堀田正邦（羽侯）、藤波侯（三品藤波公、堂上家か）に対する詩がある。

一方、字数の少ない五言絶句は、即興の作である。「両国橋納涼」、「東叡山」、「叡趾蓮池」（不忍池）、「八月二日発江都、会暴雨颶風、前路梗塞、宿品川駅両日、戯題主人壁」がそれである。

以上のように、詩型からも竹山の力の入れ方の違いを窺うことができる。

詩以外に、賛や跋を収録しているのも、人に求められたためではあろうが、それを『東征稿』に収めているのは、様々な文体の文章を書きこなすことができることを顕示しているのであろう。

なお、『東征稿』の南宮岳（大湫）の序文でも竹山が儒者でありながら文才にも優れる点に感嘆の意を表している。（送り仮名は手稿本通り）

…子慶之東スル、我知_其力メ_レ学ヲ而弘辞ナルヲ_、我知_其*篤行ニ而孱守ナルヲ_、我知_誦シ_レ経ヲ而造ル_レ之ニ深キヲ_矣。而シテ未ダ_レ知_下_肴_核ニシ_墳史ヲ_盃_盤ニスル詞章ヲ_者如キヲ_上_レ此クノ。余於ル_子慶ニ_可_レ謂_レ不_レ窺ガハ_全豹ヲ_矣。

…子慶以シ_其質性之美与ヲ_博綜之才_、而自カラ出ス_杼軸ヲ_。宜ナル乎、極_其精巧ヲ_。蓋有_是実_而有_是文_、譬フ_諸ヲ江海之濤瀾虎豹炳鬱ニ_、乃不ル_レ能ハ_自隠ス_者爾ミ。

〔校勘〕○知其　刊本は「其知」に作る。

孱守（せんしゅ）は謹むこと、墳史は古書や歴史書、肴核は肴と果物のこと。私は、竹山が儒者として人格、学問ともに優れているのを知っていたが、歴史や詩文にまで長じている（「歴史をおかずにし、文学を器にする」と表現する）ことは知らなかったというのである。そして、その才能は自然と現れたものであるとして、売文、自己顕示の謗りを牽制している。以上の序文の記述を見ても、『東征稿』の目的が竹山の万能ぶりを売り込むことにあったことがわかるだろう。

ちなみに、竹山の漢詩文集『奠陰集（てんいんしゅう）』では、どのような詩型の詩がどのぐらい見えるのであろうか。懐徳堂記念会編『懐徳堂遺書』所収の『奠陰集』は文体別になっているので各詩型の収録数を数えることができる。誤差はあり得るがおおよそ以下のようである。

巻一：古体詩 4 首、五言古詩 25 首、七言古詩 38 首？、五言排律 15 首
巻二：五言律詩 146 首、七言律詩 210 首
巻三：五言絶句 218 首
巻四：七言絶句 608 首（巻三から続く）、雑体詩 13 首、謎詩 12 首、詩余 5 首
巻五：賦 1、論 2、説 7、伝 5、記 11
巻六：序 40
巻七：牋 1、啓 2、書 31、尺牘 21
巻八：賛 111、銘 29、頌 4、箴 2、題跋 71
巻九：祭文 5、行状 1、墓誌銘 31、その他（記事など）

つまり、今に残る竹山の詩を見渡しても、七言絶句の数が多いが、その他の近体詩も多いことがわかる（弟の履軒とは違い古体詩は非常に少ない）。

以上、本章では、『東征稿』の詩文は、七言絶句が多いが、他の形態の詩文もまんべんなく収録されていること、その目的は竹山の才能を開示することにあったであろうことを述べた。

3．内容による分析

本章では、『東征稿』に収録されている作品の内容を分析することにより、同書の特徴を探りたい。『東征稿』に収録されている全 91 篇の詩文は、大まかに言って、「贈答」「懐古（歴史）」「叙景（風景）」「旅情」の四種類に分類できる。どれか一つに限定することがむずかしい詩も多いが、筆者の分析によるとおおよそ以下のようになる。

＊以下、すべての詩文を分類したわけではない点は注意されたい。なお、数字は収録作品の通し番号で

ある。傍線は「4．旅の概観」で取り上げた詩を示す。「贈答」はその相手を、「懐古」と「風景」とはその題材を挙げた。

(1) 贈答（22首以上）

1、2、4、22羽侯、27羽侯、30諸僚、55羽侯、58菅公、60大坂の人、61津金子隣、62加藤子常（大坂人）、70川上習之（大坂人）、71井上仲竜、72,73藤波公、74井上仲竜、78佐藤子錦、84渋井子章、85細井世馨、86南宮喬卿、87井上仲竜、91大坂諸子

以上の贈答詩からは、竹山の交流の様子を確認することができる。以下、各人物について述べる。

すでに述べたように、羽侯は堀田正邦である。近江宮川藩主で二条城城番も勤めた。この旅の主役であるが、江戸到着後急逝した。

細井世馨、井上仲竜、南宮喬卿は共に尾張の儒者で、『東征稿』の評は細井が、序は南宮が書いている。渋井太室の『西上記』跋によれば、竹山は、支援者であった白木屋を通じて、これらの儒者に序文や評を求めた[4]。竹山は旅で得た人脈をさっそく頼っているのである。

74首目に登場する北圃仲温（恭）は和歌山藩出身で学者でもあり本屋でもあった。『熊野遊記』という紀行文も書いている。

渋井太室は、下総佐倉出身の儒者で、堀田正邦に仕えた。上述の細井世馨らとも交流があった。『西上記』の跋文は渋井太室による（ただし、竹山手稿本では改変を示唆する書き入れが見え、竹山は太室の漢文に意見があったことがわかる）。

菅公は京都の公家高辻世長である。菅原道真の末裔で、代々文章博士を務めた。竹山や弟の履軒の支援者であった（拙稿「『洛汭奚囊』―中井履軒の京都行」参照）。藤波公は公家の堂上家だと思われる。

(2) 懐古（22首以上）

11山辺赤人旧居、14銀杏村（秀吉生地）、15熱田（日本武尊）、17今川義元墓、18八橋（『伊勢物語』）、19岡崎（徳川家康）、20宝蔵寺（家康）、21宮地山（持統天皇）、28熊野（ゆや）故居、29一言坂（本多忠勝）、32菊川（藤原宗行）、36宇津の山（『伊勢物語』）、38駿河（今川義元）、39富士川（『伊勢物語』）、44黄瀬川（源義経）、45三島大社、46箱根、49早雲寺（北条氏墓）、53十間坂（足利尊氏）、54藤沢遊行寺、83泉岳寺（四十七士）、90曽我兄弟墓

以上の詩は、歴史に対する造詣の深さと自らの表現力とをアピールしたものであろう。

(3) 風景（16首以上）

6瀬田、7草津、24富士、25富士、33大井川（富士）、34大井川、35阿倍川（富士）、37美保松原（富士）、38薩埵峠（富士）、43箱根、47箱根（芦ノ湖）、51大磯、52馬乳川、68不忍池、74木母寺、89江之島

以上、竹山が詠んでいる場所は、いずれもきわめて有名な所である。特に富士山を含む景色は繰り返し詠まれている。

(4) 旅情（5首以上）

26浜松（旅の中間点）、57浪華橋、64両国橋（大坂を思い出す）、66隅田川、88品川

4．旅の概観

本章では、『東征稿』の詩を具体的にたどることにより『東征稿』の旅を概観したい。

【意気揚々たる出発】

一行は四月に京都を出発し、五月に江戸に到着した。竹山は威光灼々たる一行の様子を詩に詠んでいる。
＊以下、数字は通し番号。

四月二十二日発京師 (3)
（四月二十二日 京師を発す）
画戟青旛出護台　画戟青旛 護台を出づ
平安城外曙光開　平安城外 曙光開く
載毫千里虚随逐　毫を載せ 千里虚く随逐す
多愧翩翩書記才　多く愧づ 翩翩たる書記の才に

出発に際しての詩である。画戟（がげき）とは飾りの付いた鉾、青旛（せいはん）とは青い旗で、儀仗の立派な様子を表現している。護台とは、堀田正邦が在番を勤めた二条城のこと。下二句では、錚々たる一行に自らが加わることを謙遜している。

湖上別諸友 (4)
（湖上 諸友に別る）
旌蓋雲行不可攀　旌蓋 雲行して攀（よ）づべからず
湖山秀色映離顔　湖山の秀色 離顔に映ず

季鷹原愛生前酒　季鷹 原と愛す 生前の酒
為約秋風命駕還　為に約す 秋風駕を命じて還ると

湖上とはおそらく琵琶湖の打出の浜あたりだと思われる。打出の浜は、京都の人々が旅に出た縁者を送迎した所であったからである（児玉幸多『中山道を歩く』417頁）。

旌蓋（せいがい）は旗と衣笠で旗の儀仗のこと。雲行は、雲のように群がって行くこと。季鷹は晋の張瀚のこと。『蒙求』に「張瀚適意」の表題で、仕官を捨てて故郷に帰った人物として、陶潜と並んで取り上げられている。見送りの人は竹山の出世を祝う詩を送ったのであろう。それに対して、竹山は、「自分も季鷹と同じく秋には帰ります。江戸で仕官することはありません」と言っているのである。

上石山寺 (5)
（石山寺に上る）
二十年外一躋攀　二十年外 一躋攀
石丈*相逢似旧歓　石丈 相逢ひて 旧歓に似たり
却怪江湖漁釣客　却て怪しむ 江湖漁釣の客
寺門今日簇金鞍　寺門 今日 金鞍に簇（むらが）るを

〔校勘〕○丈　刊本は「犬」に作る。

躋攀（せいはん）はよじ登ること。石丈は、宋の米芾（べいふつ）がある奇石を愛でて呼んだ呼称。二十年ぶりに訪れた石山寺で、境内の石の様子は昔通りだったが、立派な出で立ちを見て庶民が群がってくる点が違うというのである。

【処士であることの表明】

威光灼々たる一行の様子を詠いつつ、竹山は自らが処士であり、一行の中では異質な人物であることを詠っている。

轎中口号 (8)
（轎中の口号）
節鉞揚威山復河　節鉞 威を揚ぐ 山復た河
勢駆魑魅挫蛟鼉　勢ひ魑魅を駆り蛟鼉（かうだ）を挫く
駅吏望塵轎下拝　駅吏 塵（しゅ）を望みて轎下に拝す
不知南郭濫吹過　知らず 南郭が濫吹して過ぐるを

草津と鈴鹿の間で詠まれた詩である。

口号とは即興の詩を言う。節鉞の節は符節、鉞（えつ）は大斧。ともに征討の時、威信を示すために天子から将軍に授けられたもの。蛟鼉（こうだ）は亀の一種であるが、魑魅（しょうみ）とともに化け物を言う。南郭濫吹とは、南郭という人物が笛を吹けるふりをして楽団に混じっていたこと。能力のない者が、高い地位にいることを喩える（『韓非子』内儲説上篇に基づく）。化け物をも畏れさせる錚々たる一行に無能な自分が混じっていると卑下しているのである。

舟遡莢川 (13)
（舟にて莢川を遡る）
莢川滾滾接桑瀛　莢川滾滾として桑瀛に接す
風払蒹葭帆葉軽　風 蒹葭を払って 帆葉 軽し
莫怪中流頻顧眄　怪しむ莫かれ中流頻りに顧眄するを
此心原与白鷗盟　此の心 原（も）と白鷗と盟ふ

莢川（さやがわ）は、佐屋川のこと。当時、佐屋宿から桑名宿までは川船による三里の渡しで結ばれていた。白鷗は、黄庭堅の「登快閣」という詩に「此心吾与白鷗盟」という句がある。「鷗盟」で隠居して鷗を友とすること。自らが在野の人間であることを表明している。

【堀田侯への贈答詩】

堀田侯のために詩を作ることは竹山にとって重要な仕事であった。以下、その中の一首を紹介したい。

舟渡天竜川、上羽侯。 (27)
（舟にて天竜川を渡り、羽侯に上（たてまつ）る）
竜川洶湧是通津　竜川洶湧 是れ通津
津吏争邀車馬塵　津吏 争ひ邀（むか）ふ 車馬の塵
君侯抱負経綸業　君侯 抱負す 経綸の業
応*憶中流撃楫人　憶ふべし 中流 楫を撃つ人

〔注〕○応　手稿本ではレ点だけがあり、刊本では、レ点と送り仮名「ニ」とがある。簡潔を旨とする懐徳堂点を意識し「べし」と訓んだ。

中流撃楫とは、「敵を征伐しなければ再びこの川を渡らない」と誓った晋・祖逖（そてき）の中流撃楫の誓いを言う[5]。渡し守たちが争って一行を迎えたことと堀田侯を志の高かった祖逖に比していることから、堀田侯に対する竹山の心遣いを感じ取ることができよう。

【道中の様子】

以下、竹山が道中の名所旧跡を詠んだ詩をいくつか紹介したい。それぞれの名所を歌に詠み、自らの教養と表現力を見せることも竹山にとって重要な仕事であったはずだ。

宝蔵寺前枯松一株　東照大君所植云*（20）
（宝蔵寺前、枯松一株。東照大君植える所と云ふ）
伝聞寺畔喬松樹　伝へ聞く 寺畔の喬松樹
照后*児時手自栽　照后 児たる時 手自ら栽ゆ
莫言幹蓋成枯落　言ふ莫かれ 幹蓋 枯落を成すと
別有清陰蔽九垓　別に清陰の九垓を蔽ふ有り

〔校勘〕○東照大君所植云　刊本なし。○照后　刊本は「覇祖」に作る。

照后は家康のこと。手稿本では、「覇祖」の上に貼り紙をして直されている。徳川家に対する配慮から表現を改めたのであろう。また、刊本の元本は、手稿本が現在の姿になる前に流出したテキストであることがわかる（跋にも「迨成、留其編、別録所成致之」と見える）。

現岡崎市本宿町字寺山にある宝蔵寺（法蔵寺）には現在も「お手植えの松」（御草紙掛松）があるが、すでに三代目だという。詩を見ると、竹山が訪れた時には枯れていたことがわかる。松は枯れたが、家康が基礎を築いた治世は全国を覆っていると詠っているのである。九垓（きゅうがい）は地の果てまでの意。

雨中発芳原*（43）
（雨中 芳原を発す）
芳原駅路雨紛紛　芳原の駅路 雨紛紛
菡萏峰前望不分　菡萏峰前 望み分たず
厭我吟評連日聒　我吟評連日聒しきを厭うて
山霊鎖断万重雲　山霊鎖し断つ万重の雲

〔校勘〕○芳原　手稿本では「ヨシワラ」と振り仮名を振る。

菡萏（かんたん）は蓮の花。富士山の別名が芙蓉（＝蓮）の峰であることから、ここでは富士山を言う。富士山が見えないのは、私が連日うるさく詩を詠むので、山の霊が煙たがって雲で鎖してしまったからであろうという。

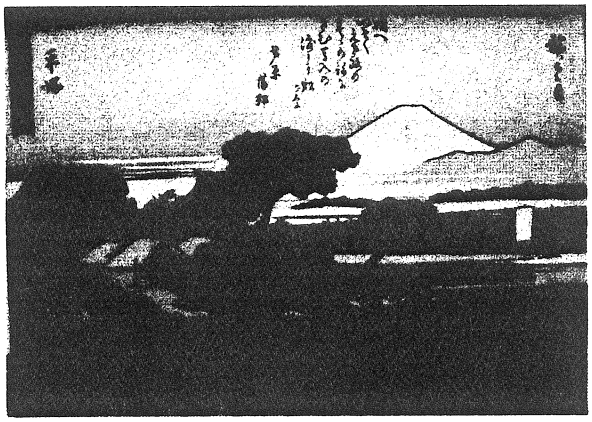
大磯（51）
海浜砂礫若珠璣　海浜の砂礫 珠璣の若（ごと）し
五彩累累世所希　五彩累累として世の希なる所
児時曾有人持贈　児たる時 曾て人の持し贈る有り
豈意如今襭客衣　豈に意はんや 如今 客衣を襭（はさ）むを

海岸の砂利は五色に輝き宝石のようだ。子どもの時、人が贈ってくれたことがあるが、今日自分で拾い集めることになるとは思わなかった。襭（けつ）はつま挟む（着物の褄を帯に挟み中に物を入れる）こと。いくつになっても、海岸の珍しい石は人を引きつけるものなのであろう。

舟渡馬乳川（52）
川為甲国猿橋下流、国中多種葡萄。
（舟にて馬乳川を渡る
川 甲国猿橋の下流と為りて、国中多く葡萄を種（う）ゆ）
聞道峡中多馬乳　聞道（きくなら）く 峡中 馬乳多しと
何時玉液灑成川　何れの時か 玉液 灑ぎて川を成す
安将雨後初醅色　安んぞ雨後初醅の色を将（も）ちて
酔殺舟中偽謫仙　酔殺す 舟中の偽謫仙
（割注：李白襄陽歌、遙看漢水鴨頭緑、恰似葡萄初醅醅。）

馬乳川とは、平塚宿の東端を流れる馬入川（ばにゅうがわ）。相模最大の川なので、相模川とも呼ばれた。詞書きに見える猿橋は、現山梨県大月市にある橋。橋脚を使わず、両岸からのはね木で支えられている。甲州街道沿いの宿場にあるため広く知られ、日本三奇橋の一つとして歌川広重や十返舎一九にも取り上げられた。7 世紀に猿が互いに体を支えあって橋を作ったのを見て造られたという伝説がある。

竹山が馬入の渡しを渡る時、雨で水が濁っていた。それを竹山は、名前の通り馬乳のためか、上流に植えられている葡萄が発酵したためか、とうそぶいているのである。



広重作「馬入の渡し」

ちなみに、馬入の語源は、鎌倉幕府を開いた源頼朝

が建久 9 年（1198）、相模川に架けられた橋の渡り初めの際、馬もろとも川に落ちたという故事にあり、馬の乳とは関係ない。

葡萄の発酵については、割注にあるように、李白の「襄陽歌」の「遠くから漢水を望むと鴨の頭のような緑色をしている、まるで発酵し初めの葡萄酒のようだ」を踏まえる。謫仙（たくせん）は天上から地上に流された仙人。酒仙と称された李白に対して、自分はただの酒飲みなので偽仙人だと謙遜しているのである。

唐詩に対する知識とユーモアとを開陳した作品と言えよう。

藤沢遊行寺、聞老僧在院。（54）
（藤沢遊行寺、老僧院に在りと聞く）
散脚道人生坐性　散脚の道人 坐性を生じ
烏藤鉄錫掛床頭　烏藤 鉄錫 床頭に掛く
因知世事多翻案　因りて知る 世事の翻案多きを
閉戸先生今遠遊　閉戸先生 今 遠遊す

藤沢遊行寺は、現在、神奈川県藤沢市にある時宗総本山の寺院清浄光寺（しょうじょうこうじ）のこと。代々の遊行上人が法主（ほっす）であるため遊行寺（ゆぎょうじ）の通称で知られる。烏藤とは、藤の杖。

行脚で有名な遊行寺の和尚は寺院に籠もり、一方、家に閉じこもっていた私は現在、長旅に出かけている。世の中の変化は大きいなと詠っているのである。自分が江戸に行ける喜びを表現するとともに、立派な伽藍に閉じこもる僧侶を皮肉っているのであろう。

【江戸での様子—文人との交流】

江戸に着いた竹山は、盛んに交流を行ったようだ。芝（現在の新橋駅付近）にあった龍野藩の江戸上屋敷を訪れ、中井家の出身の龍野藩の旧知と再会を果たした[6]他、尾張藩の儒者や佐藤子錦という奥州の人とも詩の応酬を行っている（78 首目）。

まずは、大坂の友人で宛てた詩を紹介したい。

寄浪華諸友（60）
（浪華の諸友に寄す）
抽毫擁伝暫離群　毫を抽き伝を擁して 暫く群を離る
呉海函峰万里雲　呉海 函峰 万里の雲
客裡琴歌猶旧態　客裡の琴歌 猶ほ旧態
故人休勒北山文　故人 勒するを休（や）めよ 北山の文

勒（ろく）は刻むこと。北山文は、孔徳璋「北山移文」を言う。隠居している振りをして利禄を求める偽隠者を風刺する文章である（『文選』巻 43、『続文章規範』巻 1 などに見える）。

竹山のもとにおそらく「出世されたんでしょうね」という祝い（皮肉？）の文が届いたのであろう。それに対して、竹山は、「皆さんのもとを暫く離れ、はるばる江戸まで来ましたが、私の文才は全く進歩していません。利禄を求めているなどとからかわないでください」と詠んでいるのである。

周囲が竹山の江戸行をどのように見ていたのかを確認できる詩である。

次に紹介するのは、尾張藩士津金子隣との贈答詩である。津金子隣は、諱は胤臣、幼名新丞、字は子隣、号は鴎洲、黙斎。幼少より文武にすぐれ、寛保 2 年（1742）に家督を相続。勘定奉行などを経て、寛政 3 年（1791）、熱田奉行・船奉行となった（『朝日日本歴史人物事典』）。

和尾藩津金子隣、席上見贈韻。（61）
（尾藩の津金子隣が席上贈る韻に和す）
書剣生来臥海畿　書剣 生来 海畿に臥す
東関只有夢魂飛　東関 只だ夢魂の飛ぶ有り
金鞍偶逐公程便　金鞍 偶たま逐ふ公程の便
朱邸新瞻大国輝　朱邸 新たに瞻（み）る大国の輝
麈尾論心交際密　麈尾 心を論じて 交際密（しげ）く
床頭散帙世気稀　床頭 帙を散じて 世気稀なり
宗藩文教聯奎壁　宗藩の文教 奎壁を聯ね
誰識餘光接少微　誰か識る 餘光の少微に接するを

私は、ずっと畿内に籠もり、江戸に来ることなど夢の中でしか果たせなかった。偶々、堀田侯に随行して江戸の華やかな様子を目にすることができた。お蔭で、文人たちとも膝を交えて語り合う機会にも恵まれた。というのである。

書剣は、文人が常に携帯したものから、文人のこと。麈（しゅ）は大鹿で、麈尾とは払子をいう。奎壁（けいへき）は宝石で、ここでは優れた人を言う。少微は、星の名で処士を言う。賤しい自分が高貴な人と接する名誉に浴したと言を尽くして述べているのである。

次は、渋井太室らに誘われて木母寺を訪れた時の詩である。

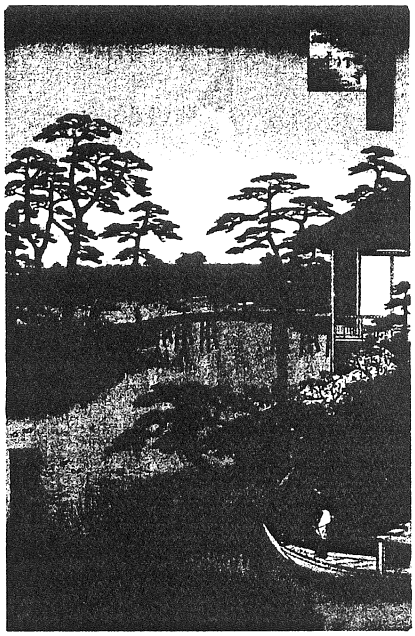
北圃仲温買船。渋井子章、紀世馨、南宮喬卿、井上仲竜、揖予泛墨水、上木母寺。聞仲竜吹笛、因贈。（74）
（北圃仲温船を買ふ。渋井子章、紀世馨、南宮喬卿、井上

仲竜、予を揖して墨水に泛び、木母寺に上る。仲竜の笛を吹くを聞き、因りて贈る。）

繫纜低徊墨水湄　纜を繫ぎて低徊す 墨水の湄（ほとり）
梅児塚畔夕陽時　梅児 塚畔 夕陽の時
瓊葩落尽無消息　瓊葩 落ち尽くして消息無く
底事殷勤笛裏吹　底事（なにごと）ぞ殷勤に笛裏に吹く

「3．内容による分析」で述べたように、北圃仲温は、和歌山藩の人。名は恭、字は仲温、号は恪斎。『熊野遊記』『熊野名勝図画』という著書があることから、旅行を好んだことが窺える。

木母寺は、現東京都墨田区にある天台宗の寺院。山号は梅柳山。院号は墨田院。梅若丸の悲話で有名で、木母は「梅」を解字したもの。名所江戸百景の一つに「木母寺内川御前栽畑」がある。内川と呼ばれる水路で隅田川とつながっていた。瓊葩（けいは）は玉のように美しい花。仲竜が笛を吹くのを聞き、梅若丸が母を思って吹いているのであろうかと詠っているのである。



木母寺（「名所江戸百景」）

竹山の交流を知ることができるとともに、当時の江戸ののどかな様子を窺うことのできる詩である。

【失望—堀田侯の死】

竹山が供をした堀田正邦は、江戸到着後間もない明和9年6月2日（1772年7月2日）に急逝した。この江戸行が、西村天囚の言うように堀田侯を頼っての就職活動であったかどうかはさておき、後ろ盾を失った竹山が失意に陥ったのは確かであろう[7]。

竹山は堀田侯の挽詩を三首残している。以下に紹介するのはその中の一首である。

臨墨津*（66）
（墨津に臨む）

白鳥飛鳴墨水津　白鳥 飛鳴す 墨水の津
萋萋芳草見遺塵　萋萋たる芳草 遺塵を見る
京華迢遞腸堪断　京華 迢遞 腸 断つに堪へたり
我亦天涯失意人　我も亦た天涯失意の人

〔校勘〕○墨津　手稿本には「スミタカワ」と振り仮名を振る。

萋萋（せいせい）は茂る様。遺塵は後に遺った塵で、古人の遺跡を言う。ここでは、『伊勢物語』「東下り」の都鳥の故事を言うのであろう。迢遞（ちょうてい）は隔たっていること。

隅田川に臨んで、昔、京都の人が都鳥を見て京都を思い出したという故事を思い起こし、自分も故郷を離れた地で失意を味わっているというのである。

稿を改めるが、帰路では竹山は未曾有の風水害に遭遇する。障害の多い旅であったが、竹山はそれを題材として文才を発揮したのである。

以上を通して見えるのは、竹山の強烈な自己顕示欲である。竹山の弟履軒の明和3年（1766）の京都行も出世を意識したものであった（拙稿「『洛汭奚嚢』—中井履軒の京都行」参照）。だが、竹山の場合、資産家を通じて有名な文人に序、跋、評を請い、出版を目指している点に、弟の履軒との欲望の違いを確認することができよう。

5．おわりに

以上、本稿では、中井竹山『東征稿』所収の詩を分析し、竹山の江戸行の様子を明らかにした。『東征稿』の詩を見ると、竹山が手を尽くして自らの文才をアピールした様子を確認することができる。

「1．はじめに」で述べたように、『東征稿』『西上記』は、執筆後、80年余りを経た嘉永6年（1853）になってようやく刊行された[8]。だが、竹山は、『東征稿』『西上記』執筆の翌年、安永2年（1773）には、すでに、江戸で交流を持った尾張藩の南宮岳（大湫）に序を、細井徳民（平洲）に評を、堀田侯ゆかりの佐倉藩の渋井太室（子章）に跋を書いてもらっている。この点にも、竹山の『東征稿』宣伝工作を確認することができよう。

注

[1] 堀田正邦。享保 19 年（1734）～ 明和 9 年 6 月 2 日（1772 年 7 月 2 日）。近江宮川藩（現長浜市）の第四代藩主。堀田家宗家六代。宝暦 8 年（1758）大番頭になった。官位は従五位下、出羽守。

[2]『懐徳堂考』下 14 頁「竹山の江戸行は何の為なりしやを知らず。…堀田侯の推挙にて幕府に仕へんとせしにや。」

[3] 懐徳堂文庫蔵『大日本史』竹山跋（竹山著『奠陰集（文集）』巻 4 にも見える。「書院蔵書大日本史後序」）を参照のこと。

[4]『西上記』安永 2 年（1773）序「三月上巳、請世馨高卿至、則大村子図*送致是編与書。去年臘月、二子又訪予云、『夫人復来如何。』語未畢、子図送致詩与書牘、如上巳時。河山之邈、浮沈之虞、雖侯伯之報期所不必得而再得此奇者、我交瀕乎有神矣。且書云『下評語及文字于前後。』我三人便受一役去。」

＊大村子図とは、呉服商白木屋の六代目主人大村彦太郎。

[5]『晋書』巻 63「列伝第 32 祖逖」

「帝乃以逖為奮威将軍、…仍将本流徙部曲百餘家渡江、中流擊楫而誓曰、『祖逖不能清中原而復済者、有如大江。』辞色壮烈衆皆慨歎。」

＊『蒙求』にも「祖逖誓江」の標題で見える。

[6]「税駕*芝邸、与諸親姻相見」（56）

＊税駕は旅行者が休息すること。

[7]「1．はじめに」、注 2 参照。ただ、その後、竹山は堀田正邦の息子の正穀とも関係を維持している（加地伸行編『中井竹山・中井履軒』、96 頁、102 頁）。

[8] この刊行には、多くの出版物を出した山崎久作（美成）が関わっている。江戸の出版事情を知る上で興味深いが、ここでは詳細は省く。

参考文献（＊本文に見える順番）

(1) 西村天囚（時彦）『懐徳堂考』（同志出版、1911 年）
(2) 田中佩刀「中井竹山と「東征稿」」（『明治大学教養論集』51 号、1969 年）
(3) 富士川英郎・佐野正巳編『紀行日本漢詩』第 3 巻（汲古書院、1992 年）
(4)『日本儒林叢書』巻 12「随筆部雑部」（鳳出版、1971 年）
(5) 懐徳堂記念会編『懐徳堂遺書』（松村文海堂、1911 年）
(6) 湯城吉信「『洛汭奚嚢』―中井履軒の京都行」（大阪大学文学部・懐徳堂センター『懐徳堂センター報』2004、2004 年）
(7) 児玉幸多『中山道を歩く』（中公文庫、1988 年）
(8) 加地伸行編『中井竹山・中井履軒』（明徳出版社、1980 年）

＊本稿は、平成 23 年度科学研究費補助金・基盤研究C「江戸期の漢文遊記の研究―懐徳堂を中心に」〔研究代表者・湯城吉信〕による研究成果の一部である。